

学術研究実績報告書

申請書との変更点およびその理由(内容、日程、実施場所、参加者等で変更があれば記入)

変更は特にありません。

研究実績概要

研究代表者(申請者氏名・所属機関・職名):

中川功一・大阪大学大学院経済学研究科・准教授

研究課題名:

「M&A がイノベーション推進に与える影響:半導体産業のデータ分析より

研究期間: 2017年 12月 1日 ~ 2017年 12月 1日

概要:(1,000字以内で記述)

近年、ハイテク産業ではイノベーション推進の手段として技術獲得を目的としたM&Aが積極活用されるようになってきている。その目的は大きく2つに分類できる。第一は、自社の現行の技術蓄積の方向性に沿ったかたちで積み重ねるタイプの技術獲得「Exploitative(活用型)」であり、もう一つは自社の技術蓄積方向を変えるための技術獲得「Explorative(探索型)」である。

目的意図の異なるこの2つのM&Aが存在することは既存研究で明らかとなっていたが、企業がどのようなときに、どちらのタイプを活用する傾向にあるかについては未知のままであった。本研究ではそこで技術獲得のためのM&Aが積極的に行われている半導体産業を対象としてこれを分析した。本研究は理論的な土台としてポーターの外部環境ベースの競争戦略を用い、現在の事業環境が収益的に望ましいものであれば、それを維持するために現状の技術蓄積を維持しようとする:Exploitativeを選択する、現在の事業環境が収益性の悪いものであれば、別の市場へと移動するためにExplorativeを選択するだろうと推測を立てた。

これに基づき、半導体産業の技術獲得目的M&Aを2001年-2013年の期間について探索したところ、89件が各社財務データを含む十分な情報をもつ利用可能なケースとして収集された。このうち47件がExploitative、42件がExplorativeであった。ロジット回帰モデルを用いて検証したところ、市場規模が大きい、あるいはマーケットシェアが大きい場合にExploitativeが選択される可能性が高いことが明らかとなり、推測の妥当性が検証された。またその他、特定の製品領域に事業を絞り込んでいる場合、その製品領域での競争力を維持するべく、Exploitativeが選択されやすいことも明らかになった。

このことは、業績好調のときには企業は他の技術領域の探索が疎かになりがちであるという示唆と、その逆に業績不調の折にはさまざまな技術領域へと資源をばらつかせがちになるという示唆を与えている。こうした傾向になりがちであることを踏まえ、企業は将来の技術方針を考えたM&Aを実施しなければならない。